

## 世界の森林の減少と歯止めをかける努力

獨協大学経済学部教授 犬井 正

### 世界の森林の現状

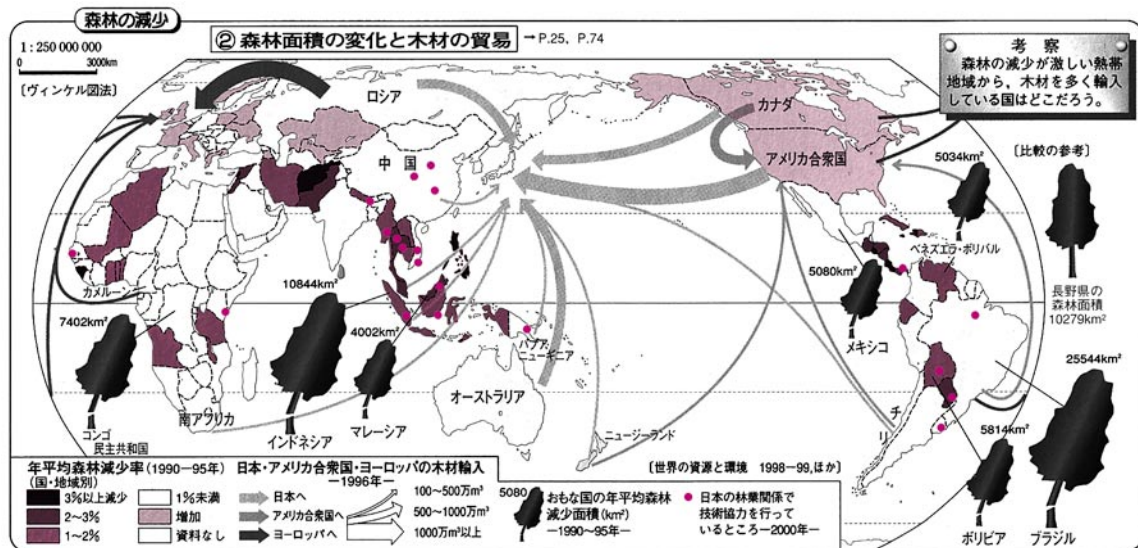
地球上には、いったいどのくらいの森林があるのだろうか。現在さまざまな森林に関する統計が発表されているが、国連食糧農業機関（FAO）がまとめた『世界森林資源評価』によると、2000年現在の世界の森林面積は38億6,900万haと推定している。この数値から見ると、森林は南極を除く地表面の約30%を覆っているにすぎない。人類はその歴史の大部分の時代において、燃料、食料、木材、肥料、飼料、紙など生存と生活に不可欠な多くの資源を森林から獲得してきた。それと同時に水、土壌、気候、生物の多様性など森林が深く関与する恵みも享受してきた。しかし、近年の人口爆発と経済活動の拡大・活発化によって、地球上の森林面積は縮小するとともに、こうした森林の役割は急速に低下している。

これまでの地球の森林面積の変化を見ると全体では減少しているが、先進国と発展途上国に分け

て見ると、近年、前者のグループの森林面積は比較的安定して推移しており、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ諸国など森林面積が増加しているところすら見られる（地図参照）。それに対し、後者のグループの発展途上国の森林は減少しており、とくに、熱帯アフリカ、東南アジア、中南アメリカを中心にして急減している。そして森林の面積が縮小している熱帯地域の国々から、日本、アメリカ、ヨーロッパの国々は大量の木材を輸入している。世界最大の木材輸入国である日本は、アメリカ、カナダ、ロシア、オーストラリア、マレーシア、インドネシア、チリ、パプアニューギニアなど、太平洋沿岸各国から大量の木材を輸入し（地図参照）、それぞれの国の森林生態系に多大な影響を与えている。

### 熱帯林の減少と新たな森林破壊の拡大への懸念

発展途上国の森林の減少は主として熱帯林の減少によるものであり、毎年、日本の国土面積の4



帝国書院版「新詳高等地図 最新版」p.109

割に相当する広大な熱帯林が減少している。その原因として、過度な焼畑耕作や森林火災、薪炭材や商業的木材の生産のための過剰にして不適切な伐採のほか、開墾して広大な牧場や農地にすることなどがあげられる。また、熱帯林を持つ途上国の政府による鉱山開発、大規模な水力発電用ダムや幹線道路の建設にともなう森林伐採なども行われている。発展途上国は貿易収支の悪化、累積債務の増大、国内経済開発資金の不足という一連の問題に直面している。そのため、外貨獲得の手取り早い手段として、原生林伐採が当然のこのように進められている。つまり、発展途上国での急激な人口増と貧困、それに先進国による大量の木材需要などが絡み合っの、森林の開発と破壊が行われている。そして、熱帯林の劣化・減少の結果、地域住民の薪炭材の不足をはじめとして、彼らの生活と福祉を脅かしていることや、地球温暖化や生物多様性の喪失といった地球環境問題への影響が惹起している。

北半球の高緯度帯に位置する亜寒帯林(北方林)は、熱帯林と並んで広大な森林地域である。その

うちの約70%がロシアに、ついで北アメリカ大陸に25%弱が分布する。これらの地域は、いずれも世界の主要な木材産品の輸出地域になっている。そして世界最大の木材輸入国である日本は、アメリカ、カナダ、ロシアを中心として、多量の丸太材、チップ・パルプ材、製品材等の木材を輸入している(地図参照)。

最大の亜寒帯林が存在するロシアでは、シベリアの森林破壊が緊急の問題として浮かび上がっている。この森林はタイガと呼ばれる針葉樹林地域で、ウラル山脈から東に北太平洋までの広大な地域に広がっている。現在、世界に残された最も大きな原生林といわれているが、ソ連が崩壊して新生ロシアになってからは、政治的な混乱もあって森林管理は野放しに近い状況になっている。多発する森林火災に加えて乱伐や過伐が行われており、森林がきわめて不安定な状態にある。シベリアの極東地域のシホテアリニ山脈では、1995年以降、最も価値が高いシベリアスギの伐採が、大型重機により急ピッチで進み、森林生態系の危機が叫ばれている。シベリアの気候条件は厳しいので、樹

木の生長が遅いし、更新も容易ではない。しかも、大型重機による地表の攪乱が、森林の再生をますます困難にしてしまう。木材輸入大国の日本が、熱帯林について亜寒帯林とその森林生態系をも破壊させることにならないような今後の対応が必要である。

### 持続可能な森林経営に向けて

1950年代中葉に始まる日本の高度経済成長期に、住宅建築ブームが訪れ、木材の需要が急速に高まった。しかし、国産材は若齢級が多く、供給量が乏しいために、木材需要量をまかなうことができず、いきおい海外からの安価な木材輸入に依存しなければならなかった。建築用材だけでなく、合板、パルプ、チップなどの工業原料も含めて木材需要のすべての面において、急速に海外資源に依存する体制が確立されてきた。その結果、1960年には22.3%であった外材依存度は、現在、80%前後に達しており、生産国の森林破壊を加速させてきた。

森林資源は、本来、更新性の資源であり、適切な修復や管理をすれば持続可能である。森林の開発と木材の輸入を即時停止すれば、森林破壊に歯止めがかかるという主張もあるが、そのような単純な図式ではない。発展途上国は、生活水準向上や経済発展のためにも森林資源の開発が今後も必要であるというジレンマに立たされている。したがって、日本の果たすべき役割は、発展途上国の経済発展が労働集約的な方向に進むように援助していくとともに、国際熱帯木材機関(ITTO)の国際熱帯木材協定に掲げられた「木材貿易は持続的に管理された森林からの木材に限る」という条項を、具体化していくことが重要である。

最近、製紙業界の木材チップのように、産業用の原材料調達を目的とした「産業植林」が、海外で盛んに行われている。「海外産業植林センター」

によると、2000年末現在、日本の企業が海外で行っている産業植林は、南半球を中心に9か国、計30プロジェクト、植林面積は29.2万haで、国内の再造林や拡大造林面積を大きく上回っている。さらに、地球温暖化防止の一つの方策として、森林による二酸化炭素の吸収機能が評価され、電力などのエネルギー産業や住宅建設業界、自動車産業等も事業へ参入している。このような植林は、短期間で高収穫が期待できる早生樹のユーカリ、アカシア、ラジアタマツなどの少数の種が用いられている。早生樹は生長するのは速いが、その分大量の水分を必要とする。機械による高効率な収穫をするため、樹木は樹齢をそろえて一定の間隔で植えられ、化学肥料、除草剤や殺虫剤なども使用されている。こうして本来の森林の姿とは異なった植林によってできた樹林地は、水資源の枯渇や地域固有の貴重な自然生態系を消失させてしまう。さらには土地住民の立ち退きにつながったり、土地所有権の不公平や貧富の格差を増大させたりするなど、「森林減少の歯止め策」として必ずしも有効ではない面も指摘されている。

日本人は森林の恵みに包まれて、自然と一体になって暮らしてきた。近代技術と世界各地の森林文化との共通項を持っている日本人は、両者の調和をめざしながら、持続的開発を可能にするこれまでの近代文明に変わる新たなパラダイム(枠組)を世界中に説きうる立場にあるのではないだろうか。世界の森林資源をこれ以上減少させずに保全するには、大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会システムから、リサイクル型さらには森林資源の完全再利用をめざした循環型へとパラダイムをシフトさせ、次世代に地球上の森林資源を引き継いでいく努力を継続する必要がある。

#### 【参考文献】

犬井正 (1995) 「世界の森林資源と日本の役割」 農林統計調査 45巻7号

石弘之 (2003) 「世界の森林破壊を追うー緑と人の歴史と未来ー」 朝日新聞社